会員の声　1945 年生まれから見た“戦争と平和”（その 4）

金沢支部　平口　哲夫

今年は、2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、巨大津波と東京電力福島第 1 原発事故という未曽有の複合災害を被ってから 10 年目に当るが、復興を遂げているとは未だに言い難く、事故を起こした原発はコントロールしきれておらず、被災者の受けた物心両面の傷は癒されていない。では、第二次世界大戦後 10 年目の 1955 年は、どうだったのか。この連載記事の「その 3」において、1953 年の朝鮮戦争勃発に伴う内灘砲弾試射場問題に言及したが、当時、小学生だった私の思い出に戻って、今回の話を始めることにする。

金沢市平和町にあるスーパーマーケット「ニューアルコ」の前身は「平和センター」と称し、戦後、満州(現・中国東北部)からの引揚者などがそれぞれ色々な小売店を営業していた。その背後にある平和町公園は、私が小学生の頃は運動場となっており、平和町の町内会が主催する運動会や野外映画会などの会場として利用されていた。 その野外映画会で上映されたニュース映画で広島・長崎に投下された原爆関係の映像が写されることがあった。それを一緒に見た、5 歳年上の姉が「ピカドンのニュース映画は学校でも見たことがあるよ、もっとひどい場面があったよ」などと話していた。これが私の“ピカドン” との最初の出会いである。このニュース映画は、1954 年 3 月 1 日にビキニ環礁で行われたアメリカ軍の水素爆弾実験による「死の灰」を浴びた遠洋マグロ漁船「第五福竜丸」のことや、無線長だった久保山愛吉さんが急性放射線症を患い半年ほど経ってから死亡したことなどを報じる過程で広島・長崎の原爆投下にも触れたのかもしれない。

北國新聞 2021 年 4 月 19 日朝刊に「平和の願い新たに」、「開町 75 周年で記念展」、「引き上げ者移住で誕生体験伝える」というタイトルによる記事が掲載されている。その序文を以下に紹介する。

“終戦直後、海外からの引揚者や戦災者が移住して誕生した平和町。開町から 75 周年を記念して、町の由来などを紹介する企画展が 21 日、町内で開かれる。過酷な引き上げ体験を伝える資料や、昭和天皇が行幸した当時の写真を並べ、「平和のまち」の願いが込められた町の歩みをたどる。”

この連合町会協議会主催「記念展・平和町の生い立ち」の会場は「ニューアルコ」、 開催期間は 5 月 11 日～5 月 15 日なので、 5 月 13 日に拝見してきた。展示を企画した新矢政紀氏は、金沢市立野田中学校の 4 学年先輩、同窓会でよく会う知人のうちの一人である。満州からの引き上げ者らでつくる北陸満友会のメンバーが展示に協力している。新矢氏も同会に属しており、幼少期を満州で過ごし、引き揚げの道中、「親の背中から離れたら終わり」と子どもながらに恐怖を感じたという。

さて、高校入学後、日本史と世界史の教科書が手に入ると、なぜ日本はあのような無謀な戦争をしたのだろうという問題意識から、まず近・現代を読み、つぎに原始・古代から順に読み進んだ。父が購入した『世界の歴史』(中央公論社)も全巻読み、そのせいか、東北大学に入学する際には西洋史を専攻しようと思ったほどだが、自分の適性を考慮して考古学を専攻することにしたのである。しかも、卒業論文・修士論文は日本の後期旧石器文化に関するものであった。けれども、考古学を専攻したことは戦争の起源について考古学的な視点から考えるきっかけになり、金沢医科大学に就職してからは、一般教育の授業でもそういう話題を取り入れて授業をするようになった。

1963 年 3 月、高校 2 年の終わり頃に行われた修学旅行では、広島平和記念資料館や長崎の大浦天主堂・平和公園も見学した。広島平和記念資料館では、バスによ る乗り物酔いのせいで体調が悪かったせいもあるが、初めて見る展示に「さむけ」 を覚えた。この記念資料館には、大学 3 年

のときの考古学研修旅行の際や、2005 年 10 月 1 日に広島市のアステールプラザ中ホールで開催された第 25 回世界連邦日本大会の際にも見学した。三度目の見学のときは、通路の壁に張ってある、父を原爆で亡くした女の子の作文に、家にいて足音が近づいてくると、幼い妹が「あっ、お父さんだ！」と叫んで、外に飛びだすが、他人だったのでションボリ戻ってくるということを何度も繰り返した思い出が書かれていて、読むうちに涙で目が曇ってしまった。

この日本大会の懇親会会場で湯川スミ先生(湯川秀樹博士の奥様)を囲んで女性たちが記念撮影をしているところに仲間入りさせていただいた。先生は車椅子を使用 しておられたが、90 歳半ばとは思えないほど、とても若々しくお元気であった。その 2 年前の 2003 年に先生に手紙を出し、世界連邦運動協会石川県連合会のニューズレターに寄せられた玉稿をホームペー ジに再録させていただきたい旨、お伺いを立てたけれども、ご返事がなかなか来ず、2004 年 4 月に脳仙塞で金沢医科大学病院に入院中、丁重なご承諾のお手紙をいただいた。先生のもとには世界各国から手紙が寄せられ、その一つ一つにご返事を書くのにとても時間がかかるので、私の手紙に対する返事が遅くなってしまったとのこと。これを読んで、とても感激した。

前列左から二人目が湯川スミ先生、後列左から二人目が筆者

核兵器廃絶を含む軍縮は、地球温暖化効果ガスを減少させるためにも、また COVID-19 感染症などの疫病の世界的流行や巨大地震・津波などの自然災害に対処するためにも、余力を生むという点で不可欠であり、世界連邦の実現がその鍵となるであろう。（つづく）

平口哲夫, 2021:「会員の声 1945 年生まれから見た“戦争と平和”(その 4)」(世界連邦 Newsletter 665, 7-8)を改変。